

品川睦明先生の思い出

重松恒信*

昭和12年4月、京大理学部に入学、分析化学ユーブングの初日、石橋先生、嘉儀、岸、原田、船越の諸先生と新しく卒業された品川さんらに伴われ、満開の櫻と銀閣寺疎水散策で歓迎されたのが初対面の時であった。同級生に六高での友人がいて、特に先生の印象が大きく残っている。以来この4月13日勤務先の一つである豊岡での訃報に接するまで半世紀を越える長い間、師として、また友として過せた幸を改めて追憶している。

卒業研究を、海洋化学の研究に出帆、楽しそうな石橋研究室に入れて頂き、テーマは軍艦岳石の分析化学的研究、当時岳石の研究をされていた品川先輩から手ほどきを受け、御面倒をおかけしたわけで、先達である許りでなく恩師とも言うべきかと考えている。丁度、39年海水中の金を還元、コロイドとした後透析、主成分を除き、試金定量されているが、私に一生つきまとった微量成分の分離濃縮への開眼であったように思われる。

戦後、また石橋研でご厄介になり、親しく接し、先生の室に製塩研究に関係した織機を思わせる縄製の装置など発想の妙を感じたことが昨日のようである。物のない時代、パラフィンで汙紙に道を描き、金属を展開発色させパラフィン分析を発表されたことが思い出され、楽しく談笑し乍ら発想、これを実行、発展して行く科学者品川の片鱗が感じられる。その後オニウム化合物のポーラロの研究を通して生命科学へのアプローチを語り、また石橋先生の、Ra-ThからのThBミルキング、Pbをトレーサーとする放射分析化学の伝統を踏え、京大R1実験室の設立準備に参画したが、途中広島

* 京都大学名誉教授 近畿大学理事



大学へ移られ、彼地に放射化学を開花させた……迅速汙紙電気泳動法の着想と発展、短寿命核種の分離とその応用など。京大R1実験室は私の化学研究所での仮の住い、というには余りにも永い10年を過ごした科となったのも何かの因縁であろうか。

36年大阪大学へ移られ、お会いする機会の増加は、有難いことであった。阪大での御活躍の一部分は、原子力学会関西支部、三十年のあゆみに見ることができようか。先生の最後の筆とも思われる“昭和41、42年の頃”を興味深く読ませていただいた。常々“愛される原子力”を心にされて、……自然科学（技術）は公害を必ず伴うが、どうしても自然科学自身はその対策を講じなければならぬと結ばれているが、その中に原子炉事故での噴出放射性ガスを多価荷電体として捉え、磁場により捕えることに着想、これを実験的に確かめ、日本人の発想と軽視せず、原子炉爆発対策に役立てて欲しいとある。まさに品川さんこそ、音頭をとって推進する時間を与えて欲しかった。

温顔に笑みをたゝえた話しぶりを思い出しながら、偉れた自然科学者、教育者、品川先生を追憶し、御冥福を祈る。

品川睦明氏の御略歴

1913年広島県に生まれる。第六高等学校を経て1937年京都帝国大学理学部化学科を卒業。石橋雅義教授に師事し、副手、助手、講師を経て1945年助教授。1951年広島大学理学部教授（分析化学講座を担当）。1961年大阪大学工学部教授（原子核化学工学講座を担当）、1977年定年退官。1945年理学博士。1964年「分析化学におけるオニウム化合物の適用に関する研究」により日本分析化学会学会賞。1971年日本分析化学会近畿支部長。1972年日本分析化学会副会長。大阪大学名誉教授、松下電子工業株式会社顧問、日本分析化学専門学校名誉教授。日本分析化学会名誉会員。（財）海洋化学研究所顧問。平成元年4月13日ご逝去。